

精神看護方法論(看護学科 3 年次)の授業紹介

～精神科看護師の方の協力でリアリティのあるロールプレイング!～

平成 23 年 7 月 25 日 (月) 1・2 限に、精神科看護におけるコミュニケーションのロールプレイング演習を行い、ノーブルメディカルセンターから副看護部長の鬼頭和子さん、新垣病院から看護科課長補佐の天願聡さん、琉球病院から看護師の下地陽貴さんが来てくださいました。

1 限目は学生が患者・看護学生のそれぞれの役を体験する演習でした。学生はそれぞれロールに徹しており、その後のディスカッションでは「緊張した」「どうしていいかわからなかった」「聞いてて辛くなってきた」などの看護学生役の意見や、「そばにいてくれてうれしかった」「どうせあなたにはわからない、と思った」「話さないつもりが(学生役に優しく話されて)気がついたら話してる自分に驚いた」などの患者役の意見があり、ちょっと興奮気味に、でも活発にお互いの思いや意見を述べ、相互の学びを深めながら、自分なりの精神科看護における



治療的コミュニケーションについて、学びを整理する場となりました。さらに“沈黙って何だろう?”とテーマを絞って検討するグループもあり、「悪いばかりじゃない」「患者にとっても看護学生にとっても安心感だったりする」「程よい間」「わかってたつもりがやっぱりよくわからなくなった」など現象の意味の探究にも発展し、教員としても非常に刺激の多い時間でした。



2 限目は精神科の臨床看護師の方の演じる模擬患者にかかわる体験やオブザーバー体験を通して、効果的コミュニケーションおよび治療的コミュニケーションのあり方について検討しました。患者—看護学生のロールプレイの場面をみんなが円になって取り囲み、学生が関わっては全体で振り返りをし



あぁ学生さん、僕は今仕事が忙しいわけさ…



今は患者さんには優先することがあるんだな…。それを理解しよう

う～ん、僕だったらどうするかなあ…？



て、また次の学生が取り組むというようにしていると、学生の関わり方はどんどん変容し、工夫し、自分なら…の発想でかかわっていく様子は、まるで1つの看護チームと患者さんとの関係の発展過程を見ているようで、非常に興味深いものでした。初めは「看護師としての役割を果たさないといけない」という思いから、「患者さんにとって優先することがあるのなら、それを一緒に考えてみることのほうが大切なんじゃないか」という考えに変わり、会場全体が気持ちを揺らしながら、でも患者さんの言動に集中していました。患者さんを臨床の看護師が演じることで「イメージが違った」「すごい！」「疾患理解が深まった」など、演習がより実践のイメージに近いリアリティのある場になっていたことが分かりました。臨床の実践家の方々にご協力いただいたことに感謝です。さらには演じてくださった魅力的な患者さんの世界にすっかり惹きこまれ、実習で患者さんに出あい、関わらせていただく日が楽しみになった学生もぐんと増えました。「看護師の方の実際の看護師役もみて参考にしたかった」という意見や、翌日のクラス全体での振り返りを通して「みんな同じように悩んでいて、ちょっとほっとした」「いろんな視点があって他のグループの発表も面白い」などの意見があり、今後の発展へのヒントも得ました。

臨床の方にはご多忙な中、ともに教育に携わってくださり心から感謝しております。臨床の方とのコミットメントし、学生も教員も臨床の方と相互に成長しあえるような関係をこれからも大切に発展させてゆきたいと考えています。

精神看護学（鈴木、伊礼、平上）